

I. 野生生物保護学会将来構想検討会の目的と経緯

1. 目的

野生生物保護学会将来構想検討会は、2020年を目標とした野生生物保護学会のあるべき姿を示し、それを実現するための行動計画を検討することを目的として設立された。

2. 検討会委員

委員長 吉田正人（学会副会長、将来構想検討担当）

委員 上田剛平（前青年副部会長）

開発法子（学会理事）

草刈秀紀（学会理事、フォーラム誌編集長）

鈴木克哉（青年部会長）

谷口美洋子（行政研究部会幹事）

横山真弓（学会理事、将来構想検討担当）

3. 検討の経緯

2009年2月 第1回野生生物保護学会将来構想検討会

2009年5月 第2回野生生物保護学会将来構想検討会

2009年11月 第16回野生生物保護学会にて会員アンケート実施

2010年2月 野生生物保護学会ホームページ上でアンケート実施

2010年3月 第3回野生生物保護学会将来構想検討会

II. 野生生物保護学会の現状と評価～会員アンケートより

1. アンケートの方法

2009年11月、第16回野生生物保護学会大会において、参加者に対するアンケート調査を行った。また大会に参加できなかった会員の意見を聴取するため、2010年2月に学会ホームページ上にて、ウェブアンケートを行った。

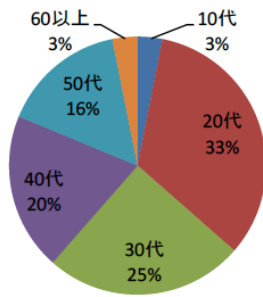
2. アンケートの結果

1) 回答者の属性

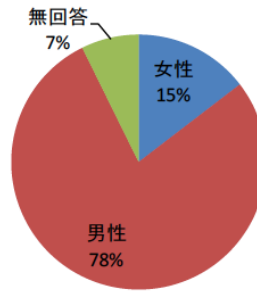
回答者は96人（会員数の20%）。男性が78%、女性が15%（無回答7%）と偏りはあるものの、年齢層は、20代が最も多く33%、30代（25%）、40代（20%）がこれに次いでいた。なお、正会員が45%、青年会員が39%、非会員が12%（無回答4%）であり、会員経験は5年未満が47%、6年以上が41%であった。職業は、研究機関（大学）が最も多く31%、民間20%、学生16%、研究機関（行政）12%、行政10%がこれに次いでいた。

1 回答者の属性

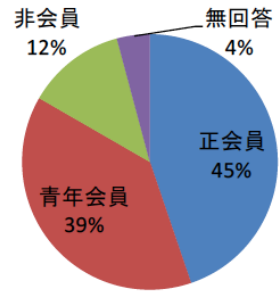
(1) 年代



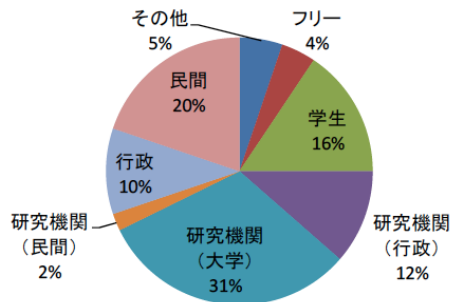
(2) 性別



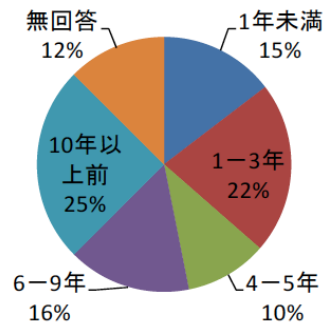
(3) 会員種別



(4) 所属



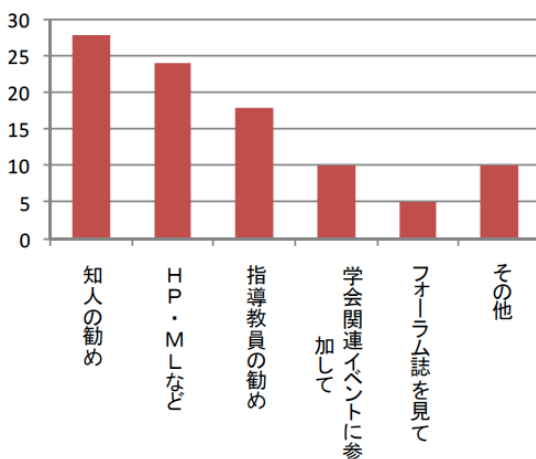
(5) 入会時期



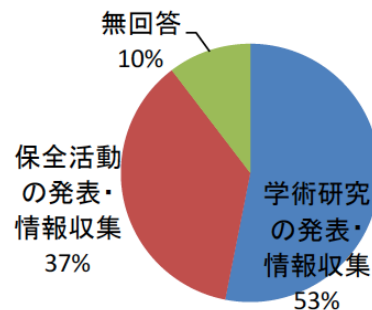
2) 入会の動機と満足度

入会目的は、学術研究の発表・情報収集が 53%、保全活動の発表・情報収集が 37%であった。入会の経緯は、知人の勧めが最も多く (28 人)、ホームページ・メーリングリスト (24 人)、指導教員の勧め (18 人) がこれに次いでいた。学会に対して、満足 (7%)、どちらかといえば満足 (14%) と答えた人よりも、不満 (7%)、どちらかといえば不満 (33%) の比率が高い。会員を継続する (50%) が半数いる反面、退会を検討 (3%)、様子を見る (35%) と答えた人も多い。

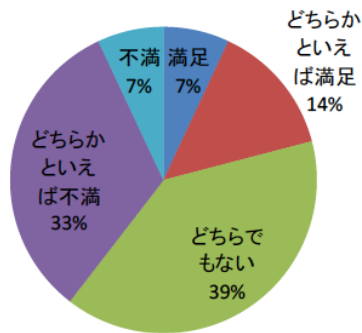
(1) 入会経緯 (複数回答可)



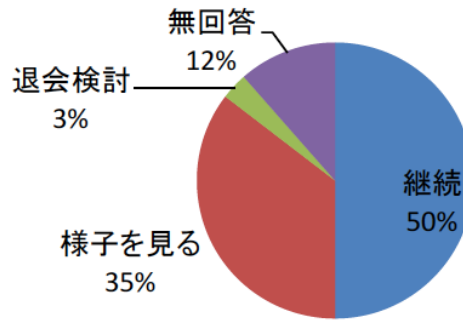
(2) 入会目的



(3) 入会目的に対する学会の現状



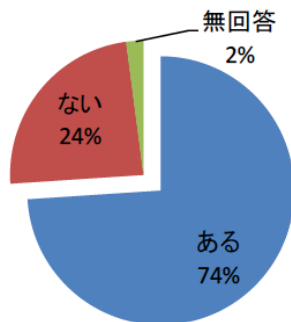
(4) 会員継続意思



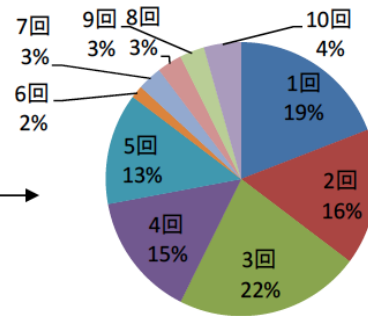
3) 学会大会への期待と評価

学会大会には74%が参加経験があると回答したが、その内訳は5回未満が85%、6回以上は15%であった。今後の大会参加については30%がぜひ参加したい、69%が条件が合えば参加したいと答えた。ぜひ参加したいと回答した人からは、自分の研究発表の場としてふさわしい、有用な現場の情報が得られる、普段は会えない人と出会う機会が得られるという評価があった。条件が合えばという人からは、大会の日程、場所などに対する意見が多く、大会日程の告知が遅く日程調整が難しいという声が聞かれた。

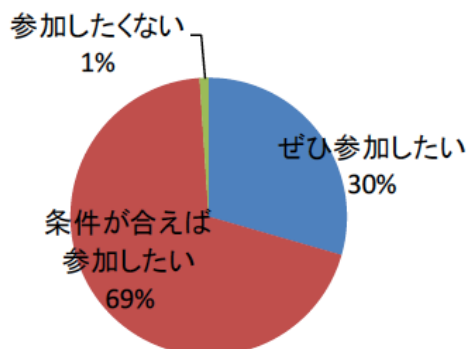
(1) これまでの大会参加の有無



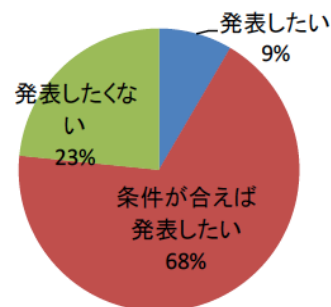
(これまでの大会参加数)



(2) 今後の大会参加意思



(3) 発表の意思

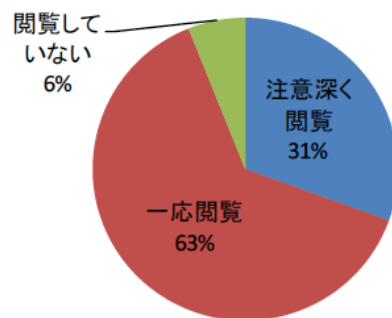


4) 学会誌への期待と評価

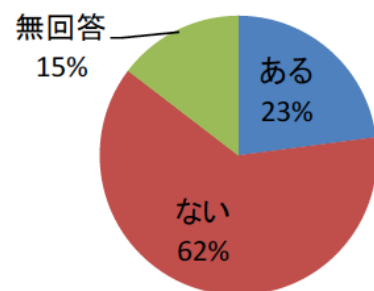
和文誌については、注意深く閲覧（31%）、一応閲覧（63%）に対して閲覧しないは6%。投稿経験ありが23%、投稿経験なしが62%であった。今後の投稿意思については、投稿したいが20%、条件が合えば投稿したいが70%であった。発行回数は、適切が54%、少ないが27%であった。改善すべき点として、定期的な発行、論文査読の迅速化、野生生物保護管理の現場情報等幅広い記事の掲載が期待されている。英文誌はなくさないで欲しかったという声も若干聞かれた。

(1) 和文誌について

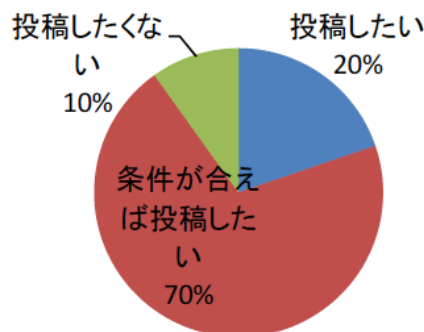
① 閲覧状況



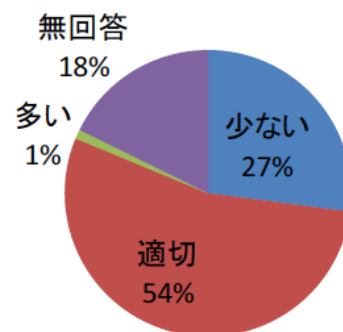
② 投稿経験



③ 今後の投稿意思



④ 発行回数

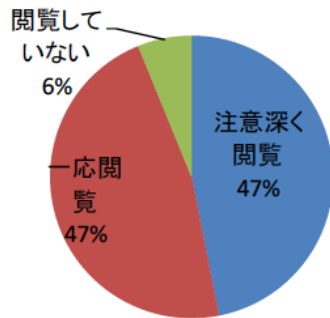


5) フォーラム誌への期待と評価

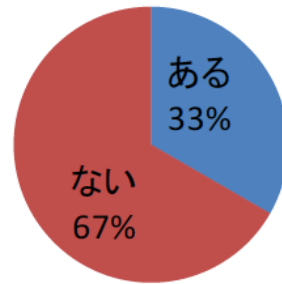
フォーラム誌は、和文誌に比べて、注意深く閲覧（47%）の比率が高く、投稿経験ありも33%であった。一方、投稿したいという人は7%であり、条件が合えば投稿したいが78%であった。発行回数は、適切が66%で、少ないは6%であった。発行回数や特集などについてプラスの評価があったが、一方で改善すべき点として、学会内部の内輪の記事は最小限にして、野生動物（哺乳類）に偏らない幅広い記事を載せてほしいという意見が聞かれた。

(2) フォーラム誌について

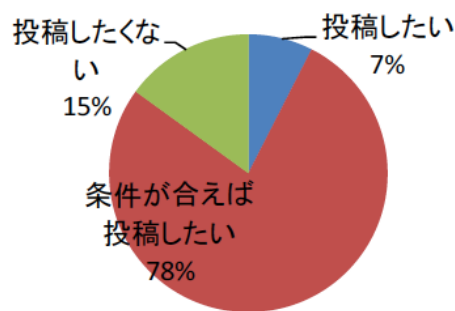
① 閲覧状況



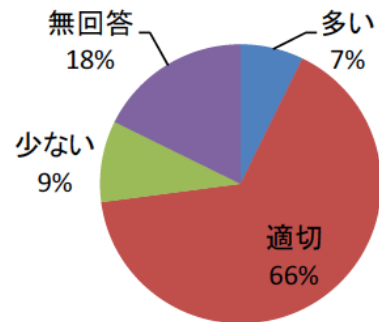
② 投稿経験



③ 今後の投稿意思



④ 発行回数



6) 今後の学会への期待

すぐに取り組むべき課題として、①研究者と実務者の情報交換・交流が最も多く、②国内への問題解決への取り組み、③分類群を超えた情報交換・交流、④学際的展開、⑤手薄な分野の研究者への働きかけ、⑥行政分野への働きかけ、⑦人材養成、⑧保全分野の国際的貢献、⑨NGO/NPO への働きかけ、⑩手薄な分類群の研究者への働きかけがこれに次いでいた。研究者だけでなく、行政等の実務者、獣医などとの連携、研究分野では社会学分野、植物分野などとの連携を期待する声が聞かれた。

これまで進められてきた学会の改革や青年部会の活動を評価する意見が聞かれる一方、学会誌の定期的発行、学会大会の開催準備などに対して、さらなる改善を求める意見も強かった。新たな会員の拡大策として、哺乳類学会、生態学会とは違った特色の明確化(研究と実践の連携など)を求める声、学会の名称の検討(「野生生物保護」という言葉に抵抗)などを求める声も聞かれた。

III. 野生生物保護学会の将来構想

1. 野生生物保護学会の現状評価

・野生生物保護学会は、会員数 500 名の小規模な学会ではあるが、若手の会員が多く、研究者だけでなく行政・NGO 等の実務者も多いという特色を持っている。一方、研究分野が野生動物に偏っている、社会科学等の分野の会員が少ないなどの問題も指摘される。

・この 4 年間、会費事務の正常化、学会誌・フォーラム誌の定期発行、青年部会・行政研究部会の活発化などの改革に取り組んできたが、学会誌の定期発行や学会大会の魅力拡大などについては、まだまだ不十分という評価が多い。

・アンケート結果からは、学会活動に満足している会員よりも不満を抱いている会員が多く、会員を継続するという会員は半数にとどまっている。そのため、学会の基本である学会誌の定期発行、学会大会の開催などに関して緊急に対策をとるとともに、将来に向けてより魅力のある学会とするため、さらなる改革を進める必要がある。

2. 野生生物保護学会の今後 10 年の方向性

会員アンケートおよび将来構想検討会の検討結果から、今後 10 年間、野生生物保護学会がめざすべき方向性として、以下の 3 点を挙げる。

- ① **野生生物と人との関係に関して、研究者と実務者が集い、自然科学と社会科学にまたがる学際的な研究発表と情報交流の場を創出する。**
- ② **野生生物と人の問題の解決をめざし、保護管理の現場から学ぶとともに、研究成果を現場に生かすネットワークを創出する。**
- ③ **若手の研究者・実務者に、野生生物保護管理に関するトレーニング、キャリアデザインの機会を提供する。**

3. 野生生物保護学会が緊急に取り組むべき課題

以下の 2 点については、アンケートを通じて、特に会員からの要望が強く、ただちに改善を図らなければ、会員の減少につながるおそれがある。

1) 学会誌の魅力の増大

・和文誌については、研究発表の場として学会の顔であることから、定期的刊行、査読の迅速化による投稿数の増大を図るべきである。

・フォーラム誌については、注意深く閲覧する会員も多く評価は高いものの、これまでの特集記事に加え、現場での野生生物保護管理の実践、幅広い分野の情報交流につながるような記事をより多く掲載すべきである。

2) 学会大会の魅力の増大

- ・学会大会は、研究発表の場であるばかりでなく、研究者・実務者の交流の場、新たな会員拡大の場として重要であるため、早期に開催告知をすることにより、より多くの会員・非会員に参加してもらえるようすべきである。
- ・学会大会の主幹団体の負担を軽減するとともに、部会、企画委員会（仮称）などによるテーマセッションやエクスカージョンなどを活発化させ、大会参加の魅力を増やすべきである（口頭発表とテーマセッションの時間的重複の問題解決のため、個人発表はポスター発表に集約する等の方法も検討する）。

4. 野生生物保護学会が、今後 5 年以内に取り組むべき課題

1) 幅広い分野にまたがる研究・交流の場の創出

学会誌、学会大会の他、メーリングリストなどさまざまな手段を用いて、

- ・野生生物と地域社会との関わりを総合的に議論できる場
- ・野生生物の保全・管理に関する研究および実践の経験を交流できる場
- ・野生動物のみならず、幅広い生物分類群にまたがる保全研究の場
- ・自然科学だけでなく社会科学分野まで含めた学際的な研究交流の場を創出し、野生生物保護学会の特色と魅力を作り出すことを目標とする。

2) 野生生物保護管理に関わる実務者と研究者との協働の実現

行政担当者から市民団体まで、野生生物保護管理に関わる実務者と研究者が幅広く参加できる学会とするため、行政研究部会の活動を支援し、

- ・行政、研究者、市民をつなぐ、シンポジウム、ワークショップ、トレーニングセッション等の活動を活発化させ、
- ・野生生物保護管理の現場で求められている経験・知識・技術などを共有し、
- ・野生生物保護管理に関わる行政、研究者、市民のネットワークを作る。

上記の実践を通じて、行政の中に野生生物保護管理を位置づけ、現場の実践と研究にもとづいた保護管理が行われるようにすることを目標とする。

3) 若手研究者・実務者の育成支援

野生生物保護学会の将来を担う若手会員をエンカレッジし、その活動を支えるため、青年部会の活動を支援し、

- ・若手会員の研究・実践活動の奨励のため、学会大会におけるポスター賞を始めとする奨励方法を検討し、
- ・若手会員のキャリアデザインのため、研究職に偏らない幅広い進路選択に関する情報収集と提供を行うとともに、

- ・ 若手会員のスキルアップのため、野生生物保護管理の理論と実践を体系だつて学べるワークショップ、トレーニングセッションなどを充実する。

上記の実践を通じて、野生生物保護管理に携わる研究者・実務者の層を拡大することを目標とする。

4) 将来構想計画を実現するために

- ・ 学会を安定的に無理なく運営できる財政状況にするには、会員を増やす具体的な仕掛けが必要であり、学会誌の定期発行、学会大会の早期告知の他、新たな会員拡大をめざしたチームの設置を検討すべきである。
- ・ 男女共同参画の視点から、学会の諸活動に女性の研究者・行政職員が参加しやすい工夫（託児コーナーの設置など）を検討すべきである。
- ・ 学会の活動をより特色のある幅広いものにするため、名称の変更について検討すべきである（野生生物学会、野生生物保全学会、人と野生生物学会等）。
- ・ 将来構想計画の進展を評価するため、将来構想実現化ワーキンググループを設置し、2015年までの成果を客観的に評価し、将来構想計画を見直すべきである。

IV. 将来構想実現に向けた行動計画～達成目標と担当者（案）

大項目	中項目	小項目	達成目標	担当者	
緊急課題	学会誌の魅力増大	和文誌の定期刊行	2010	編集委員	
		フォーラム誌の内容充実	2010	編集委員	
	大会の魅力増大	学会大会におけるテーマセッション・エクスカージョン等の充実	2010	～	企画委員 担当理事
5年以内に達成すべき課題	多様な分野にまたがる研究交流の場	セッション・エクスカージョン等の充実	2015		担当理事
		行政と研究者との協働	行政、研究者、市民をつなぐシンポジウム、ワークショップ、トレーニングセッションの開催	2010	～
	若手研究者・実務者の育成支援	若手研究者・実務者の奨励措置の検討および実現	2010		担当理事
		若手研究者・実務者へのキャリアデザイン、トレーニングの検討および実現	2010	～	青年部会 担当理事
	将来構想実現のために	会員拡大チームの設置	2010	～	担当理事
			2015		一般会員
		男女共同参画検討チームの設置	2010	～	担当理事
			2015		一般会員
	学会名称検討チームの設置	2010	～	担当理事	
		2015		一般会員	
将来構想計画実現化ワーキンググループ	2015		担当理事 一般会員		